

8/16/09 「マルタとマリア」 ルカ 10:38-42

ある日、主イエスは、マルタとマリアという姉妹の家に招かれました。姉のマルタはイエスに喜んでもらおうと家の中をきれいにし、ごちそうを作るために忙しく働いていました。妹のマリアは、その間ずっとイエスの足下に座って、イエスの言葉を一つも聞き漏らすまいと神経を集中していました。

マルタはその妹の姿を見て、気分を損ねます。私は大切な先生を喜ばせようと一生懸命なのに、妹は手伝おうともしない。先生の足下に座ったままだ。

マルタはイエスの話しをさえぎって妹に対する不満をぶちまけます。「こんなに私が働いているのに、妹は私を助けようともせず、先生の側に座ったままです。私を手伝うように言ってください。」

このマルタをイエスは優しく諭します。「マルタ、マルタ。あなたはどうでもよいことに思い悩み、心を乱している。必要なことはただ一つ。マリアはそれを選んだ。彼女からそれを取り上げてはならない。」

イエスを家に招待した二人の姉妹のどこが違うのでしょうか。

イエスを迎えたからには、家の中をきれいにし、たくさんごちそうを用意しなければならないと考えたマルタは、不機嫌になり、イエスと顔と顔を合わせて語り合う折角のチャンスを逃してしまいます。彼女にとって最も大切なのは、あくまでもイエスに何かを差し出すことであり、イエスから受け取ることは二の次でした。

それが故に、マルタはイエスとの出会いを体験することなく、折角イエスを家に迎え入れたにも関わらず、苛立ち、心を乱してしまったのです。

逆に、自分に必要なのは、兎に角まずイエスの言葉一つ一つに心を開くことだ、イエスから受け取ることだと考えた妹のマリアは、心の安定を得、平安を与えられます。

姉マルタになく、妹マリアにあったのは、信仰の一途さでした。何を置いてもイエスと直接向き合うか、それともイエスに自分が一生懸命働いているところを見てもらうか、イエスの前に座るか、それとも忙しく立ち働くか、二人の姉妹の根本的な違いがここに 있습니다。

マルタとマリアのエピソードは、私達に一つの大切な問いを投げかけています。自分は今何をしているのだろうか、という問いです。イエスの言葉に耳を傾けるのは後でもできると考えて、二次的なことに一心不乱になっているか。それとも、イエスの足下に座って、イエスを仰ぎ見ているだろうか。

今朝起きた時、皆さんの前にはいくつかの選択肢が横たわっていました。遅くまで寝ているという選択肢、映画や娯楽を楽しむという選択肢、家事をこなす選択肢などいろいろあった筈です。

しかし、あなたは礼拝に間に合うように家を出、地下鉄やバスに乗って日米合同教会にやってきたのです。イエスの言葉に耳を傾げるために、他のすべての選択肢を捨てたのです。その意味で、マリアの一途さの一端をあなたは今朝実践したと言えます。

あしたからまた新しい一週間が始まります。あなたは祈ることを大切にするでしょうか。聖書をひもとくでしょうか。キリストの恵みに思いを馳せるでしょうか。それとも、忙しさにかまけて、最も大切なイエスとの出会いを忘れてしまうでしょうか。

今日はマリアである私達は、明日になったらマルタに様変わりしてしまうでしょうか。この問いを私達は自分自身に常に問いかけてみる必要があります。

ここでもう一つ思い起すべき事柄があります。イエスは忙しく立ち働き、苛立ち、心を乱しているマルタに優しく二回も呼びかけています。「マルタ、マルタ。」

聖書において相手の名前を二回続けて呼ぶのは、呼びかけた相手をいたわり、慈しんでいることを意味します。イエスはマルタを慈しみ、彼女がマリアのように自分の足下に座るように説得し、呼びかけておられるのです。

主イエスは私達に語りかけておられます。「まず何を置いても私の言葉に耳を傾けなさい。私の言葉を聞きなさい。私に心を開きなさい。そしてそれを踏み台に、自分に正直に、他者に優しさの眼差しで接しなさい。あなたはそれで十分。後は私が引き受ける。」